

【特集趣旨文】

骨董・民藝を見ること、あるいは蒐集・所有すること、それはどのような経験なのか。小説家や批評家といった文学者たち、また文学者以外の者たちによっても、その経験はそれぞれに手探りで言語化されてきた。

一九三〇年前後、骨董・古美術の蒐集鑑定で知られた青山二郎の周囲には、小林秀雄・河上徹太郎・中原中也・大岡昇平・中村光夫ら文学者たちが集った。後に親交を結んだ宇野千代や白洲正子らも含め、青山に関しては多くの文章が書かれている。小林秀雄をはじめ「青山学院」で鍛えられた者たち、また、川端康成、安東次男、井伏鱒二、室生犀星など、骨董・古美術に魅せられた作家たちは数多い。彼らは自ら骨董や古美術を購入して蒐集するだけでなく、随筆や評論を書き、ときに小説の中に登場させている。

同時代には、柳宗悦を中心に、日用の雑器に「用の美」を見出す民藝運動が創始されている。後に離れるものの、青山も運動の初期には参加していた。民藝運動は、美術界では評価されていなかった無名の民衆の作り手による工芸に価値を与え、朝鮮（李朝）の陶磁器や民画、家具、また沖縄の染物など、周縁的な地域の文化の保護にも積極的に関与した。柳の運動は、時として周縁地域に対する支配・被支配の構造を補強するものとして批判もなされてきたが、その功罪を文学研究の側面から照らし出す余地はあるだろう。運動自体には小説家など狭義の文学者は参加していないが、柳は「白樺」同人であったし、保田與重郎のように運動に反応している文学者もいる。また、青山二郎が友人の作家たちの本の装幀を手がけていたように、民藝運動も芹沢銈介らによる装幀を通じて文学者と接点を持っている。

すでに美術館や文学館では、「青山二郎の眼」展（二〇〇七、世田谷美術館）、「青山二郎と中原中也」展（二〇〇六、中原中也記念館）、川端康成のコレクションを中心とする一連の展覧会、本や雑誌の装幀に着目する展覧会などが行われている。民藝に関しても、「民藝の一〇〇年」展（二〇二一、東京国立近代美術館）、「民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある」展（二〇二三、大阪中之島美術館）と、近年大きな企画展が続いている。しかし、文学者の骨董や古美術の蒐集、民藝への関心は、しばしばその作家の個人的な趣味と見なされ、エピソードとして知られていても、研究の場で論じられる機会は少ない。たとえば西洋美術の受容と比べても、個々の事例を背景にある文脈と接続して歴史的に位置付けることは十分には行われていない。

骨董に憑かれた作家たちのテキストを分析した美術史家の松原知生は、「骨董」という特異な存在がもつ思想的・文化的な意義については、まだ十分に掘り下げられてはいない。それは単に「美術」の前近代的な亜種あるいは趣味的な変種ではなく、固有の美学的＝感性論的な価値を有するものである」と述べ、「骨董の（複数の）感性論エスティクス」を提案している（『数寄物考 骨董と葛藤』二〇一四、平凡社）。骨董・民藝という具体的な〈物〉に相對し、その中に美を見出すことは、発見であると同時に新たな価値の創造でもあるはずである。それは個人の経験だが、時代の思想潮流という歴史的な文脈の中で行われたことでもある。本特集では、一九三〇年代から現代まで、文学者・美術家・建築家など複数の事例を取り上げ、骨董・民藝という〈物〉と相對する経験が何であったのか（何であり得るのか）、思想あるいは美学としての意義を明らかにしたい。

10.21²⁰²³_[土] 13:00~

会場 W103

《開会の辞》中村三春

《特集》〈物〉の経験——思想としての骨董・民藝

（講演）松原知生 近代メディアと古物のメディウム——日本近代骨董文化論序説

（発表）山本勇人 小林秀雄「骨董」「真贋」の位置——文学・美術批評との相関を通して

谷口幸代 川端文学における古美術という〈物〉の経験

坂元昌樹 日本近代文学と民藝運動——思想としての民藝の系譜

10.22²⁰²³_[日] 10:00~

《研究発表》

《個人発表》

第一会場 W202

下岡友加 夫を模倣する、文壇を侮蔑する——『台湾愛国婦人』掲載・国木田治子のテキスト戦略

スティーブン・チェ 集団としての〈子ども作者〉——『赤い鳥』における子どもと大人の共同制作

瀬口真司 前衛短歌における「帝国」の表象

小島秋良 〈戦地再訪〉と記憶の語り——古山高麗雄『兵隊蟻が歩いた』論

趙子璇 二十世紀中国の視座から三島由紀夫を読む——作品の受容と新たな解説

康潤伊 残された人々の物語——「帰国事業」と在日朝鮮人文学

松本海 「共食」神話の崩壊——高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」論——

第二会場 W201

浅井航洋 長田幹彦の新聞連載小説——通俗小説家への転身をめぐって

谷口紀枝 新聞連載小説『うき世』から映画『うき世』へ——鏑木清方の挿絵とその受容に関する一考察

英荘園 横光利一「機械」と『化学本論』

古閑裕規 江戸川乱歩作品としての「飛機睥睨」（「空中紳士」）の考察——長編作品の試作として

尾形大 チャタレイ裁判と文壇——作家・出版社・文壇の連携と切断

李楚妍 安部公房『燃えつきた地図』論——地図の象徴性と他者の生成

白井耕平 五木寛之『蒼ざめた馬を見よ』論——偽りの「文学」とミステリー

《閉会の辞》島村輝

